

あり。

加藤宗兵衛重廉——二代 圖書里重——

加藤九郎兵衛某^{保世}——三代 圖書重長^{承道}

宮城加兵衛某——同大學某

右の如く見たれば、宮城采女は無子なりしゆゑ、加藤圖書里重の次男掃部を養嗣子とし、後名を加兵衛と改稱す。延寶三年十二月三代加藤圖書重長より横山左衛門へ出したる人馬數勝手方帳に、二拾石宮城加兵衛合力米といふ事を載せたり。されば加兵衛の時家祿沒收せられ、家族加藤氏より養育ありしか。尙追考すべし。

○三社百々女來

元祿六年の帳に、三社どゞめきとあり。龜尾記に、三社邊の瀬木をどんどと云ひ、古へはどゞめきといふ。といへり。此の瀬木は鬼川の downstream にて、此所に堰ありて分流せり。堰の落つる水音高きゆゑ、小立野の百々女來と同じく、昔はどゞめきと呼びたりしかど、今は世人三社どんどと呼びて、地名の如くなりたり。或は云ふ。どゞめきといふも、どんどといふも同言にて、水のだうくと流落つる水音よ

り出でたる名也。陸士衛が歎逝賦にいへる水滔々而日度、註に滔々水流貌。とある是也と。

○三社百々女來橋

金澤橋梁記に、どんく橋三社。とあり。今はどんど橋と呼べり。江戸砂子に、牛込仙臺橋の下水せきの捨石ありて、水音ある故に世俗どんどばしといふとあり。關東の方も同俗なる事知らる。

○生駒萬兵衛重信

元祿六年の士帳に、生駒萬兵衛三社古道井上久太郎向。とあり。延寶金澤圖を見るに、三社どんどの角屋敷なり。

○生駒萬兵衛重信傳

重信は生駒内膳直勝の孫にて、生駒八郎右衛門の長男也。八郎右衛門は初兵庫と稱す。慶長十一年に利長卿被召出、三百石を賜はり、後七百石加恩ありて千石を領し、生駒氏の庶家なり。萬兵衛重信は承應三年金澤に生れ、幼名を傳吉と云ひ、寛文六年父没して跡を繼ぎ、遺領之内二百石を賜はる。時に僅に十三歳。同十一年奥小姓組と成り、延寶元年殘知七百石賜はり、千石を領す。同七年馬廻組と成

り、元祿十六年普請奉行を命ぜられ、寶永二年五月先筒足輕頭に登庸せられ、享保四年四月没す。享年六十六歳。三男一女あり。長男八郎右衛門元重家を繼ぐといへども、其の子織之助元文二年幼少にて早世し、家名斷絶す。次男大貳信行新知二百五十石を賜はり、使番先筒足輕頭を勤め、加恩共四百五十石賜はり、別家を立つといへども、其の子藤九郎直温不品行に依つに、明和元年家祿沒收せられ、是亦家名斷絶す。三男團四郎某は吉田是水の養子と成り、一女は武藤庄太夫の妻と成りたりとぞ。さて萬兵衛重信は俳諧を好み、俳名を萬子と稱し、芭蕉三友の一人にて、俳人素堂・木因と名を等しうす。俳林小傳に、萬子加賀大夫。稱生駒内膳。初藤九郎。祿八百石。號此君菴。住金澤長町。と載せたるものは、宗家の生駒氏等の事をば聞き誤りたるもの也。風俗文選作者列傳には、萬子者加州金澤之武士也。生駒氏號此君菴。蕉翁之英士也。と見ゆ、俳人涼袋が頭陀物語に云ふ。萬子は金城に祿を食んで、弓矢の中に風雅をたのしむ。その頃翁、金城に頭陀をおろし、久しく北枝が徒に遊ぶ。けふは犀川を見、かへりて小松の方に趣くと聞

き、萬子鞭うちて長亭を凌ぎ、漸く松任の驛にして、翁の杖にすがりとゞめ、俳諧夜をこめて別る。北枝は暫く伴ひゆきて、送別の涙を落せば、翁もてる扇を出し留別の吟を與ふ。よく人の知れる事也。とあり。按ずるに、芭蕉の金澤へ來寓せしは、元祿二年の秋なるよし奥の細道に見ゆ。俳家奇人傳に云ふ。生駒萬子は、加州金城の士にして、家よく富めり。蕉翁と友とし善し。元祿の頃始て翁に對面して曰く、師は諸國に門人充滿して、道の融通事足りぬべし。我今より方外の友と成りて、普く俳諧を守護すべしと盟約せしと也。後年翁再び行脚の砌、金城へ立寄られしに、此の叟後れて至り、其逢はざるを悔み、獨り裸馬に策あて、其跡をしたひ、松任にて追付きたり。馬の餞とて白衣ひとつ。金三兩さし出す。翁も其志の厚きを感心せらる。然るに金銀は盜を惹くの媒なりと辭し申されぬ。又北枝・秋の坊が急迫を救ひ、或は風流の主となつて、加陽に騷人を遊ばしむ。故に蓮二坊も此の人我が友には恐ありと、獅子物語に記せり。世に萬子を蕉門十哲の外にして、道を支・許等に傳はるとばかり覺えたるは、大なる誤也。本朝文鑑に、翁